

# 日本語と英語における節の結合方式の差 ——どのように文は長くなっていくのか

小川 明

(平成17年10月6日受理)

## A Difference in Clause-Combining between Japanese and English

OGAWA, Akira

(Received on October 6, 2005)

キーワード：節の長さ、節の連結、統語解析、SOV対SVO

Key words: clause-length, clause-combining, parsing, SOV vs. SVO

0. 本稿では小川(2005)を土台にしてさらに考察を進めたい。そこで論じたことをまず整理する。

(i) 英語の関係代名詞節と対照的に、それに対応する日本語の連体修飾節は比較的短いこと。一般に英語では後置修飾により名詞句を長くできるが、前置修飾しかない日本語では名詞句は比較的短い。

さっき境内を掃除にきたおばさん

明かりをさげてゆっくり雪を踏んできた男

(ii) 日本語では、1つの節は英語と比べて比較的短いこと。

(iii) それゆえ、日本語と英語では文を長くしていくメカニズムは異なっているのではないと思われる。日本語においては、名詞句も節も長くできないので、節をいくつも繋げていくことによって文を長くしていくのではないか。

(iv) 上のことは、日本語においては、名詞句の中心になる(主要部である)名詞が名詞句の最後にあり、文の中心になる動詞が文の最後にあるのに対して、英語ではそれぞれ中途にある事実と関係すると考えられる(SOV対SVO)。

1. 小川(2005)では、主として(i)について論じたので、本稿ではこの(ii) - (iv)をさらに調べてみたい。まず(ii)と(iii)についての考察を進めよう。手始めにいくつかの文を観察してみる。以下、/により

節の切れ目を、[ ]により連体修飾節のような埋め込まれた節を示すことにする。

(1)a. ヒトは必要に応じて、/[文が使われた]場面や自らの経験・記憶などを想起し、/さらには主体的に推論を働かせながら、/能動的に意味内容を創り出している。(『認知言語学入門』の宣伝文句)

b. 小石を敷き、/水草を植えると、/[角材でつくった]台座の上の[一トンの水をたたえた]水槽のなかで小さな生態系が生まれた。

(新野哲也「風の舞う土手」)

c. ただこの個所だけについていえば、/[花の匂いを媒介に、[耐えがたいほど/強迫してくる]現実から、スムーズに、そして一時的に撤退して、/眠りの夢のなかに入り、/安息をえたのち/また現実を恢復するのが]わかる。

(吉本隆明『匂いを読む』)

d. 読者は、この男と共に、[人のいない]路を歩き、/[人気のない]家を眺め、/風鈴の音や小鳥の鳴き声に耳をすませ、/そして、ゆったりと畳に寝そべっている、/その贅沢を味わう。

(清水正『つげ義春を読む』)

短い節が次々と連なって1つの文を形成する。ひとつひとつの節は短いとその数は多い。

(2002)を参考に整理をしておく。文はその構造から単文と複文に分けられる。単文は1つの述語からなる文である。複文は複数の述語を含みそれを中心としたまとまりからなる文である。述語を中心としたまとまりを節という。複文は複文の中心となる主節と、主節に従属する従属節に分かれる。従属節には次のように、名詞節、連用節、連体節、並列節などがある。

早足で散歩することは健康によい。(名詞節)

娘はいつもテレビを見ながら食事をする。(連用節)

きのう見た映画はとても楽しかった。(連体節)

娘は会社に勤め、息子は大学に行っている。(並列節)

形式的には、連用節と並列節の末尾は述語の連用形で終る。

医者から絶対安静を命じられ、彼はひとり病室のベッドで何日か過ごした。

あるいは接続助詞で終るものがある。

今日は連休の日だが、町の人出はそれほどでもない。

このキーを押すと、メニューが画面に表示されます。

その他形式名詞で終るものがある。

大雪で滑走路が使えないため、次の便は欠航となります。

また従属節は他の従属節の一部になることがある。

[[よくかきまぜながら] 煮ましたけれど、] こげてしまいました。

[[会場は午後こむというから、] 午前中行ってみたけれど、] 相当な人出だった。

[[おしゃべりしながら] 歩いていく] 子どもたち

[[おなかがいなくて、] 学校を休んだ] あや子ちゃん

3. さてこれを頭に入れて、本論に戻ろう。上の観察つまり日本語では節を次々と連結することによって、文を長くして行くという観察を補強するものとして、玉村(2002: 32-34)の説明を挙げる。

日本語の文章や談話では、とにかく接続語を何度も使い、長々と続けるので、冗長性を感じさせるものが多い。話しことばでは、この傾向がさらに強くなる。

事件の内容をくわしく聞くと、「ぐずぐずせ

ずに早く来てくれ」と怒り出す人もいますが、訴える人は事件を目の前にして無理もないと思えますが、知らせを受けた警視庁無線室は事件のあらましと場所がわかればすぐ管轄の署とパトロール・カーに連絡をしますが、なお出来たら目標になるものや犯人の人相等ただちに手配に役立つことがらもあわせてお知らせください。

160字余りの長い話が接続語によって一続きになっていて驚かされる。相撲で行司の判定に物言いが付いたときの説明も長い。

ただ今の競技について説明いたします。行司軍配は貴乃花のすくい投げ有利と見て、挙げましたが、同体ではないかとの物言いが付き、競技の結果、曙の手の着くのが早く、軍配どおり貴乃花の勝ちと見ます。

(1997年3月23日、春場所千秋楽、貴乃花一曙戦)

接続語句の数はおよそ100~130というのがふつうであるが、日本人はこれを頻用する点、および使用の方に厳しい制限がない点で、外国語とは機能を異にする。ドイツ語などでは個々の接続詞の用法が厳密に限定されているため、日本人のように気楽に接続詞を使うことはドイツ人には考えられない。

このように短い節を繋いでいく代わりにそれぞれの節が独立してひとつの文になり、短い文が次々続くことも極めてありふれている。

英文法は必要です。英文法は英語を使うためのマニュアルのようなものです。英文法なしで、英語を使えるようになりません。英語を母語とする人たち(ネイティブスピーカー)も、無意識のうちに英文法を身につけているのです。

(大津由紀雄『英文法の疑問』)

出立の朝、七時に飯を食っていると、栄吉が道から私を呼んだ。黒紋付の羽織を着込んでいる。私を送るための礼装らしい。女達の姿が見えない。私は素早く寂しさと感じた。栄吉が部屋へ上がって来て言った。(川端康成『伊豆の踊り子』)

4. それでは、比較的長い文を観察して英語と比較してみよう。

(2) a. ぼくは羊の肉が好きなので、／この鍋ができると／そんな観察も取材の余裕もなく、／ただもう「うまいまい、あうまい」といって食っていたので、／そのようなしきたりも仕組みも何も知らなかった。

(椎名誠「クソ食う人々」)

b. いつ頃から車に冷暖房の装置が付いたのかは／調べて見なければ／解らないが／冷房が戦後であるのは／確かなことのように／暖房の方は戦前からあっても／その装置がしてあるのは／役所などの大きな車に限られていた。

(吉田健一『東京の昔』)

c. それでも、[数少ない畏友たちの援助にすがりながら／翻訳書の幾ばくかを苦勞して咀嚼し、／人並みの人生経験を積み、／それらを糾合させることによって、／人間というこの不可思議な存在に対する解明の糸口だけはつかんでいるという] ささやかな自負がないわけではない。(小浜逸郎『人はなぜ働かなくてはならないのか』)

d. [自在に風物をえがきだし、／風景に生きた心をふきこんで／〈風情〉にかえる] しなやかな手とちがって、／機械の方はかたくるしく／威厳を張っていて／とりつきにくい上に、／望遠だとか広角だとか、／露出計だとか、／なんとかりングだとか、／実に不細工でどろくさい。

(島崎敏樹『心の風物誌』)

e. [[はたちぐらいの若ものが運転する] 小型トラックにつっこまれて／無残な死をとげた] 「緑のおばさん」が、[天国への階段をあがらせられるようなこと] ないように、／そんな階段には通行禁止の標識をたてておきたいものだし、／[私たち歩行者も気をつけることが] いろいろあろう。

(同上)

f. こういうことから、ミルワード氏は、[[類似ではなく／相違を対照させた] Dictionary of Differencesをつくることを] 提唱されるが、／それが実現すれば、／[翻訳者のみならず、[日英両国の文化に関心を持つ] 者すべてに、さぞかし興味深く有用なものになるだろうと] 想像される。

(別宮貞徳『英文の翻訳』)

g. [[外国語を習う] 新鮮さと喜びだけで充分だった] 時期が過ぎるころ、／[教科書の絵に描かれている]

白い家と広い芝生の前庭と車庫の車を見て／「アメリカ」という未知の外国の豊かさに魅せられ、／知らず知らずに憧れと羨望をいだくようになった。

(今村楯夫「ヘミングウェイを初めてよんだころ」)

h. [やおよるずの神々を信じていた] 没落士族の長男は、こうして [[唯一の神を信ずる] クリスマンとなる] 道を歩きはじめることになるのだが、／[今残されている] その誓約書に目を近づけてみると、／内村鑑三のサインは細字で意外にも弱々しく見えるほど／繊細である。(富岡幸一郎「イエスを信ずる者の誓約」書のサイン)

i. 逆に、[この事件を [古典劇を思わせる] 劇作品のように仕組むことによって、／[思いもかけないような] 事実がつきつぎとあらわにされ、／また、主役の人物たちについての未知の事実があきらかにされ、／さらに、既知の事実についても、新しい照明を当て、／新しい視界のなかで、隠れた意味合いを発見していることを] 思い合わせるなら、／[テロルの決算は作品を目指すことによって、／[この著作が本来果たすべき] ノンフィクションとしての機能をいやがうえにも高め、／一層、その機動力を発揮したと] いったいのである。

(篠田一士『ノンフィクションの言語』)

これと英語の比較的長い文を比較してみよう。

(3) a. These issues have become important to linguistic theory / because many current theories of grammar assume [that the syntactic realization of arguments is predictable to a large extent from the meaning of their verbs] (Beth Levin and Malka R. Hovav: *Argument Realization*)

b. Our goal in this book is [to provide a bridge between the line of syntactic research [that presupposes a tight connection between verb meaning and syntactic structure] and lexical semantic research into verb meanings]. (op. cit.)

c. Although the number of examples is low, / there seems to be slight tendency [for post-modification in the subject noun phrase to pull in the direction of inversion], / presumably because it is easier [to accommodate a heavier subject in end position in the clause]. (*Longman Grammar*)

*of Spoken and Written English*)

- d. The word-order options at the end of the clause make it possible, within the limits set by syntax, [to choose an order [which brings about a desired distribution of information, weight, and focus]]. (op. cit.)
- e. Despite the abnormal morphogenesis [observed in such grafts], the range of differentiated tissues [formed in such an 'experimental teratoma'] can be used [to provide an estimate of the developmental potential of the transferred tissue]. (op. cit.)

日本語と英語では、長い文を形成していくのに、どこが異なるであろうか。／と [ ] の分布に関して英語と日本語では顕著な違いが見られる。日本語では／が [ ] を圧倒し、英語では [ ] が／を圧倒している。つまり日本語では節を次々と連結していくのに対して、英語の方は埋め込みをよく用いる。

また日本語の方が圧倒的に1つの文に含まれる動詞の数が多いのである。1つの文に含まれる／の数に注目。日本語では、やはり長い文においても短い節を次々と連結していくという原理が守られている。英語はどうか。時制を持つかどうかで動詞を区別すべきか疑問の余地があるが、両方入れても動詞の数は少ない。言い換えると文の中に含まれる節の数は日本語の方が多い。

それに対して英語では小川(2005)で述べたように名詞句を長くしていくことができる。また動詞の後の要素を長くできるので1つの節そのものを長く出来る。しかし日本語と異なり、節を次々と連結していくという仕方はとらない。1つの文の中に含まれるいわゆる「接続詞」はほぼ1つか2つどまりである。

英語では、[ ] の数が多いことからわかるように、埋め込みという手段を頻繁に用いる。英語の埋め込みは主として補文と関係代名詞節の2種類である。補文には3種類あり、伝統文法で言えば、不定詞と動名詞とthat節である。

5. さらに注意すべきは、埋め込みの深さについても英語と日本語では顕著な違いが見られる。ここで久野(1973)を参考にして、右枝分かれの英語と左枝分れの日本語の差について観察してみよう。

右枝分れ言語である英語の場合は右端の要素に関係代

名詞節を次々くっ付けていくことが出来る。

- (4) John owned a cat that killed a rat that ate cheese that was rotten.  
実際にどんどん伸びていく例があることから解のように不自然には感じられないであろう。
- (5) This is the farmer sowing the corn,  
that kept the cock that crowed in the morn,  
that waked the priest all shaven and shorn,  
that married the man all tattered and torn,  
that kissed the maiden all forlorn,  
that milked the cow with the crumpled horn,  
that tossed the dog,  
that worried the cat,  
that killed the rat,  
that ate the malt,  
that lay in the house that Jack built.  
ただし主語に関係代名詞節が次々と掛かっていくのはとても理解しにくい。

- (6) The cat that killed a rat that ate cheese that was rotten went mad.

これは、一般に英語では主語をできるだけ短くする傾向があることと関係するだろう。それゆえ、英語では外置化のような主語をできるだけ短くする手段が発達している。

それとは対照的に日本語では、埋め込みを何度もくりかえすと、不自然になる。久野(1973)で示されている次の日本語の例はたしかに理屈の上では作ることができるが、実際は非常に不自然に感じられる。

- (7) [[太郎が飼っている] 猫が殺した] ネズミが食べた] チーズはくさっていた。

埋め込みの回数をへらしたり、同じ助詞を繰り返さないように工夫すると幾分不自然さはなくなるが、せいぜい2度の埋め込みが限度であるようだ。

- (8) a. [ネズミが食べた] チーズはくさっていた  
b. [[その猫が殺した] ネズミが食べた] チーズはくさっていた。  
c. [[その猫に殺された] ネズミが食べた] チーズはくさっていた。

さて次の英文の和訳を考えてみよう。(a)と(b)と二通り作ってみる。

- (9) We believe that it is quite important to note that the development of each of these models is based on

data obtained in large part from studies of isolated word recognition.

a. [[これらの個々のモデルの発展が [単独の語の認識の研究から主として得られた] データを土台にしていること] にここで注意すること] は、極めて重要であると思います。

b. これらの個々のモデルの発展は [単独の語の認識の研究から主として得られた] データを土台にしているが、[そのことにここで注意すること] は、極めて重要であると思います。

やや違った感じを受ける。後者のほうがわかりやすい。なぜか、埋め込みの深さの差が関係していると思われる。

(b) では三重の埋め込みをさせている。

この視点から、アメリカの独立宣言の訳について柳父 (1983) と安西 (2000) が述べていることを見てみよう。最初が原文で、(a) が直訳、(b) が福沢諭吉の訳、(c) が安西の訳である。日本語としてのわかりやすさの視点から比較してみよう。

(10) When in the course of human events it becomes necessary [for one people to dissolve the political bands [which have connected them with another], and to assume among the powers of the earth, the separate and equal station [to which the Laws of Nature and of Nature's God entitle them]], a decent respect to the opinions of mankind requires [that they should declare the causes [which impel them to the separation]].

a. [[人類の諸事件の経過において、[一国民が他の國に結びつけられていた] 政治的な絆を解き放ち、[自然法と自然の神の法がその国民に付与した] [分離した] 平等の地位を、地上の列強の間で占めること] がその国民にとって必要になる時], 人類の世論にたいする当然の配慮は、[[彼らが分離せざるをえなかった] 理由を宣言すべきであるということ] を要求する。

b. 人生巴むを得ざるの時運にて、[一族の人民、他國の政治を離れ、物理天道の自然に従って世界中の万国と同列し、別に一國を建てるの] 時に至ては、[其建国する] 所以の原因を述べ、人心を察して之を布告せざるを得ず。

c. 歴史の経過にともなうて、[[ある国民が政治的絆

によって他國に併属されてきたことを] 嫌い、これを解消して、自然および自然を創った神の法に従い、当然の権利として独立し、世界の列強のあいだに伍して平等の地位を占めざるをえなくなった時], 人類の輿論にしかるべき敬意をはらうならば、なぜ独立するほかないか、その理由を、ひろく内外に宣言しなければならない。

(a) が (b) と (c) に比べてとてもわかりにくいのは埋め込みの数が多いことと、埋め込みが繰り返されて深くなっていることに起因している。それに対して、(b) (c) では、埋め込みが少なく、また埋め込みの繰り返しを避けている。特に (c) では、「これ」とか「その」を用いて、埋め込みを避けている。

また (b) に関して、さらに節の短さがそのわかりやすさに貢献しているということを後で指摘したい。

以上日本語では深い埋め込みを避ける傾向があることが明らかになった。

6. 今まで日本語の理解しにくい例を考察してきたが、理解しにくいということは、文理解と関係するにちがいない。日本語では、埋め込みを繰り返すことがしにくいのはなぜか。これはどのように説明したらよいのだろうか。その説明を試みてみよう。Kimball (1973) を出発点とする (以下「原則」の和訳は大津 (1989) を利用する)。

Kimballの原則4 (文2つの原則) : 同時に解析可能な文の数の上限は2である。

この原理により、Kimballは次の自己埋め込み文の理解が困難であることを説明する。

(1) a. [The boy slept].

b. [The boy [the girl kissed] slept].

c. [The boy [the girl [the man saw] kissed] slept].

(a) は1つのSしかなく問題は生じない。(b) では、最上位のSから下方にむかって解析と進めると、最上位のSの解析が終らないうち、二番目のSの解析を始める必要がでてくる。しかし上限は2なので問題は生じない。それに対して (c) では、3つのSを同時に解析しなくてはならず理解がすぐできない。

この原則を用いて今までの例が説明できる可能性があることを示す。説明のためもう一度文例を繰り返す。重

複する [ ] の数に注目。次の理解しやすい例では、[[ ]] と二重以下である。

(12) a. [John owned a cat] [that killed a rat] [that ate cheese] [that was rotten].

b. [[ネズミが食べた] チーズはくさっていた]

Kimballの原則は、(11) のような英語に関する例のみを扱っていて、最上位のSから始めるトップダウン型の解析である。しかし日本語では、最初に出てくるSは最下位であり、ボトムアップ型の解析を考える必要があるだろう。またこの原則は日本語の左枝分れの構造にはそのままでは当てはまらない。それゆえKimballの原則に言語の差を入れ込まなければならないだろう。もしそのような修正がなんらかの形でできると仮定してみよう。たとえば、左枝分れにおけるSは、もし上位のSに埋め込まれている場合には、上位のSの解析が済むまでそのSは完全には解析が終了せず、保留しておかねばならないとしてみよう。

(13) の理解しにくい例はSが三重以上になっていて修正した原則で説明できることになる。(a) は四重、(b) と (c) は三重で、前者のほうがより理解しにくい。

(13) a. [[[太郎が飼っている] 猫が殺した] ネズミが食べた] チーズはくさっていた].

b. [[[その猫が殺した] ネズミが食べた] チーズはくさっていた]

c. [[[その猫に殺された] ネズミが食べた] チーズはくさっていた]

次の例は自己埋め込みで二重にもかかわらず理解しにくいのは下線で示すように二つのSを同時に解析する時間があまりにも長いと思われる。つまり時間という概念も取り入れる必要があると思われる。

(14) [The cat [that killed a rat] [that ate cheese] [that was rotten] went mad].

最初のSの処理をしている途中で次の長く連なったS群を処理しなければならない。そしてまた最初のSに戻らなければならない。これは主節の動詞を出来るだけ早く視野に納めることが、文理解のために必要であることと関係するであろう。小川 (2003) を参照して下さい。さて日本語の場合、たとえ二重であろうとも、文の中途に埋め込まれたSは長くなると理解しにくくなるという原理により説明できるだろう。野田 (2000) によれば、「日本語では、長くて複雑な構造をもった成分を、文の前の方に置こうとする傾向がある。」(b) の方が (a) より

自然である。

(15) a. [佐々木が [去年の夏キャンプで作った] パエリアの作り方を知りたがっているみたいだ].

b. [[去年の夏キャンプで作った] パエリアの作り方を佐々木が知りたがっているみたいだ].

その理由を次のように述べる。「長く複雑な構造をもった成分を文の前の方に出すというのは、文全体の述語成分と直接関係する成分を述語成分の近くに集め、そうでない従属節内部の成分などを遠くに追い出すということである。日本語では述語成分が文末に置かれるので、長く複雑な成分は前に出されることになる。」

また佐伯 (1998) では (a) が (b) と比べて解りやすいことを指摘する。

(16) a. [通夜の晩に集ってきた近所の主婦達の中で口の多いのでよく紛擾のもとをつくる表具師の細君が、「ほんとうに可哀さうに……同じものならお婆さんと代ればね。」と言ったのを], 煮めめの皿をかへに来たお婆さんが背中合せにゐてたしかにきいてゐたといふ。

(円地文子『東京の土』)

b. 煮めめの皿をかへに来たお婆さんが、[通夜の晩に集ってきた近所の主婦達の中で口の多いのでよく紛擾のもとをつくる表具師の細君が、「ほんとうに可哀さうに……同じものならお婆さんと代ればね。」と言ったのを], 背中合せにゐてたしかにきいてゐたといふ。

その理由について佐伯は、

長い補語、特にそれが動詞を多く含む場合、それが後にまわると、係りと受けの関係が紛らわしくなる。それを防ごうという意識が書き手に働くため、

と述べる。中途に埋め込まれたSは処理しにくいのである。

7. もう1つの問題は日本語では節が短くなる傾向があるが、それはなぜだろうかという問題である。やはり文理解の処理をよりスムーズにするためにそうなっているのではなからうか。

出発点として、アメリカの独立宣言の福沢諭吉の訳についての柳父 (1983) の観察を取り上げる。(11) に原文

と福沢の訳が示されているが、ここでは、訳のみ繰り返す。

人生已むを得ざるの時運にて、一族の人民、他国の政治を離れ、物理天道の自然に従って世界中の万国と同列し、別に一国を建てるの時に至ては、其建国する所以の原因を述べ、人心を察して之を布告せざるを得ず。

この訳について柳父は次のように述べる。下線は筆者。

文全体は、いくつかの句に切られ、はじめの一句を除いて、他はみな、[離れ]、[同列し]、[至ては]、「述べ」、「得ず」と、動詞、または動詞プラス付属語で終わっている。読者は、動詞が現れたところで、だいたいな意味を語る言葉が分り、思考の流れはひと区切りつく。ひと区切りついた部分は一応前へ預けておいて、その先へ読み進んで行ける。……こういう面から見るととき、西欧文は名詞を中心として展開してゆく構造であるのにたいして、日本文は用言を中心として展開して行く構造であると言えよう。

思考の流れはひと区切りつくという直観はとても重要である。動詞が現れたところでその文の解釈はひとまず完成する。これは次のことと符号する。

Kimballの原則7（処理の原則）句が閉鎖されると、句レベルよりも高次の統語的（ひょっとすると、意味的）処理の段階に押しやられ、句の内部に関する解析結果は短期記憶から削除される。

この句の代わりに節とすると、柳父の直観と適合する。これは私の直観にとっても一致する。またMazuka (1998)によれば、節は言語処理において基本単位である。このように考えると、1つの節ごとに言語処理がなされ、終ると違う段階にそれは移され、当面の処理の対象外になる。これは「ひと区切りついた部分は一応前へ預けておいて」と一致する。

ところが日本語はSOV言語であるため、動詞は最後まで出現しない。その時の問題点が次の中井・上田(2004)の中の広瀬友紀分担任「第6章生成文法と統語解析」で指摘されている。下線は筆者。

日常の言語活動では、人は与えられた文をいつでも「最後までよく読んで」、あるいは、「よく聞いて」からおもむろに解釈を始めるとは考えにくいことを述べた。たとえば「山田が会計士にワイロを贈った」のような単語列を目にした場合、頭から順に「山田が会計士にワイロを」あたりまで読んだところで、「山田」、「会計士」、「ワイロ」という単語がどのような統語関係によって結びついているのかを確実に予測することはできない。たとえば(13)に挙げたような可能性があるであろう(カッコ内に文[S]レベルの構造を示す)。

- (13) a. 山田が会計士にワイロを贈った。  
 ([s 山田が会計士にワイロを贈った])  
 b. 山田が会計士にワイロを贈られた。  
 ([s 山田が会計士にワイロを贈られた])  
 c. 山田が会計士にワイロを贈らせた。  
 ([s 山田が [s 会計士にワイロを贈ら] せた])

日本語における大きな問題は、一つの文において、どのような意味役割を持つ、どのような要素が必要であるかという情報を担う動詞が最後の最後まで出現しないことである。最後の動詞部分によって、上の…それぞれの要素はまったく違った役割を果たし、その内部構造もまったく異なる。

さらに仮に動詞が「贈った」であることがわかったとしても、その前にある要素すべてがその動詞と同じ文内の要素であるか確定できない。

……今読んでいる最中の文が埋め込み文を含むかどうか、含むとしたらその境界はどこにあるのかは、文がいくら長くても文の最後まで読まないと明らかにならないことが多い。これらのような、途中までだけ読んだ時点では、複数の統語構造の可能性が考えられてしまう文は、一時的に曖昧(多義)である…。

このように動詞に行くまでは多少宙ぶりである。ただしこのことは文理解上困難とはあまり感じられない。なぜか。日本語は「膠着語」であって主語や目的語は助詞によって示される。句の最後につく助詞などの要素により主語とか目的語とかについての情報は動詞が現れなくてもわかる。しかし宙ぶりんの時間をできるだけ短くすることが望ましいであろう。そうするとその動詞に掛かる要素をできるだけ短くしようとする原理が働くに

違いがない。文理解に時間という概念を取り入れることが必要と思われる。

その観点から福沢訳を見てみよう。動詞を四角で囲み、それに掛かる要素を下線部で示す。

人生巴むを得ざるの時運にて、一族の人民、他国の政治を 離れ、物理天道の自然に 従って 世界中の万国と 同列し、別に一國を 建てる の時に 至 ては、其建国 する 所以の原因を 述べ、人心を 察して 之を 布告せざる を得ず。

動詞に掛かる要素はとても短いことがわかる。

また安西は自分の訳文に加えた工夫を説明しているが、そのうちの1つが、原文にない動詞をいくつか付け加えたことである。そのことによって、動詞に掛かる要素はそれだけ短くなっている。

歴史の経過にともなって、ある国民が政治的絆によって他国に併属されてきたことを嫌い、これを解消して、自然および自然を創った神の法に従い、当然の権利として独立し、世界の列強のあいだに伍して平等の地位を占めざるをえなくなった時、人類の輿論にしかるべき敬意をはらうならば、なぜ独立するほかないか、その理由を、ひろく内外に宣言しなければならぬ。

8. 小川(2005)で英語の関係代名詞節に対応する日本語の連体修飾節は短くなる傾向があることを指摘した。しかしその連体修飾節を構成する節の長さも関係するのではないかということを指摘しておきたい。次の例は、比較的長い連体修飾節であるが、すこしも不自然と感じられない。その理由は、それを構成する節がとても短いことがその理由であろう。

(17) a. [群馬の山村に生まれ、／東京で苦学して／電気専門学校を出、／戦争に行き、／肺結核の大手術を受け、／ふるさとの生家の下の家に婿に入った] あなたは、電気技師として勤めていた鉾山が閉山になるとともに東京に行きましたね。

(南木佳士『天地有情』)

b. [いちはやく [ソ連の官僚主義が労働者の敵であること]をみぬき、／いっさいの党派性を排し、

／[熟練労働者を核とする] 組合再生をとなえる] 異端の革命家に、知性と技能をかねそなえた熟練労働者の理想をみたヴェイユは、自分が書いた論考の大半をスヴェリヌが編集する両誌によせた。  
(富原真弓『シモーヌ・ヴェイユ』)

9. さて暫定的に整理をしてみよう。文理解は英語と日本語に共通の原理によってなされる部分と異なる部分があるに違いはない。どちらの言語でも前から順序良くなされていくという点ではおなじであって、普通の場合は後ろへ戻るといえることはないであろう。

一方その違いは両言語の性質の違いに起因するであろう。それでは違う点はどこであろうか。英語は基本的には「孤立語」であって主語や目的語は語順によって決まる。それに対して日本語は「膠着語」であって主語や目的語は助詞によって示される。

また動詞の位置が異なる。日本語はSOV言語であるが、英語はSVOである。日本語では動詞は最後にあるが、助詞により、要素が動詞にどのような資格でかかっているのかは動詞が現れなくても了解できる。そしてどのような種類の動詞かはある程度予測できる。一方英語の動詞は、主語の次にすぐ出てくるのでその動詞の項がどんな種類のものかは実際の表現が出てこないうちに解ってしまう。英語では下位範疇化枠(subcategorization frame)は重要な役割をはたす。英語では核となる動詞は早い段階で出現するので、日本語と比べて、早い段階でよりたくさん情報の手が届く。

Mazuka(1998)の述べるように日本語が左枝分れ言語であり、英語が右枝分れ言語であることも処理に仕方に深く関係するだろう。

名詞句に関して修飾要素は英語では前後に置くことができる。それに対して日本語では前位修飾しかできない。日本語では名詞句の主要部になる名詞は常に最後に位置するが英語では中ほど、どちらかといえば前の方に位置する。

これらのことが二つの言語の言語処理の間に大きな差を生じると考えられる。

10. 本稿では、日本語と英語の節の連結の仕方に違いがあることを論じた。



参考文献

- 安西徹雄 (2000) 『英語の発想』 筑摩書房.
- Kimball, John (1973) "Seven Principles of Surface Structure Parsing in Natural Language," *Cognition* 2, 15-47.
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店.
- Mazuka, Reiko (1998) *The Development of Language Processing Strategies——A Cross-Linguistic Study Between Japanese and English*, Lawrence Erlbaum Associates.
- 益岡隆志 (2002) 「複文各論」 『複文と談話』 日本語の文法 4, 岩波書店.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店.
- 中井 悟・上田雅信編 (2004) 『生成文法を学ぶ人のために』 世界思想社.
- 野田尚史 (2000) 「語順を決める要素」 『言語』 9月号, 22-27.
- 小川 明 (2004) 「統語解析についての試論——英語学習者の出会う困難」 『東京家政大学研究紀要』 第44集 (1), 191-201.
- 小川 明 (2005) 「英語と日本語の名詞句の長さの比較——なぜ英語の関係代名詞節は日本語に直訳すると不自然になるのか」 『英語英文学研究』 (東京家政大学英語英文学会) 第11号, 43-63.
- 大津由紀雄 (1989) 「心理言語学」 『英語学の関連分野』 英語学大系第6巻, 大修館書店.
- 佐伯哲夫 (1998) 『要説 日本文の語順』 くろしお出版.
- 玉村文郎編 (2002) 『新しい日本語研究を学ぶ人のために』 世界思想社.
- 柳父 章 (1983) 『比較日本語論』 日本翻訳家養成センター.

Abstract

The aim of this paper is to investigate into a difference in clause-combining between Japanese and English. Clauses in Japanese tend to be comparatively short and a lot of clauses have to be combined to form a long sentence. In contrast, English clauses can be very long mainly by means of embedding. I argue that this is closely related to the structural differences between the two languages: Japanese is an SOV, left-branching, and head-final language, whereas English is an SVO, right-branching, and head-medial language. It has been suggested that parsing plays a critical role in explaining the clause-combining differences. Although the basic components of the parsing system are common for the two languages, there are differences in the language processing between them. In spite of their structural differences language processing has to be carried out efficiently and rapidly.